

# 健友俳壇 第二十三回

(令和七年七月)

健友俳壇は、会員の皆様が気軽に参加できる事業として、23回目となりました。今回は、「春の健友旅行」が実施されました。

「一般的の句」64句、「旅の句」17句の投稿があり、板橋区俳句連盟の上田 桜（うえだ さくら）氏に選句と講評をいただきました。

## 一般的の句

### ●特選（二句）

五月閑 農事放送 消えた里

武居 正次

農業に関する事柄を放送して村全体に知らせた。過疎化が進み、今ではその放送もしなくなった。

釣り人の 影なき漁港 春疾風

茂木 良一

釣り人で盛んな漁港ではあるが、今日ばかりは荒れ模様。人影も形もない淋しい漁港である。

### ●入選（五句）

病室の 老いたる母に 春の風

高橋 洋子

病室の窓を開けて春の風が部屋中にいきわたる。老いやく母君も、この春風で少し元気が出たかも。

山歴が 榛火に映える 顔の皴

森田 泰夫

いくつもの山を経験したマタギの生活が顔の皴に刻まれて榛火に浮き上がる。マタギが歩いた山の歴史でもある季語の榛火がよい。

柏谷邸 凜とたたずむ 梅の花

廣田 美由紀

豪農であった柏谷邸。建物も庭も当時がしのばれる。手入れの行き届いた庭の梅の花。

踏切を 待つ間のメール 風光る

宮川 修一

あるきスマホは危険だが、作者はしっかりとルールを守り、踏切りのバーが上がるまでの間を活用してのメール。風光の季語も良い。

岩と岩 すみれ踏ん張る 狹間かな

梅澤 輝雄

弱々しいようなすみれの力強さを発見した句。

## 健友旅の句

### ●特選（二句）

彼方へと 思いを馳せる 春の海

寺西 幸雄

春の海は、おだやかで日の光に満ちている。その海の彼方 遠く離れているもののことを思っている。詩心が感じられる。

鳥帰る 鉛の海に 雨降らず

有手 千麻

秋冬に日本に渡ってきた鳥が、春に北方の繁殖地に帰る鳥を鳥帰るという。鉛色した海はあるが、雨が降っていない。繁殖地に帰る鳥の長旅である。雨が降らずによかつたと、作者の安堵が伝わってくる。

